

たのしい観光地 第22回 中丸謙一郎 (コラムニスト)

ライブカメラで楽しむ へんなひとり旅

監視カメラはどこにでもある。いたるところから、黒いレンズで私たちの姿をとらえている。それは観光地でも同じこと。現代の監視社会を逆手にとった、新しい旅の楽しみ方。

90年代の初め頃、テレビで見ただアギリスの監視カメラ社会の実態を見て、怖い世の中だなと思った。当時の日本にも防犯カメラなどはあったが、まだまだあまり人の目につかないところにあるという感じだった。それから30年近い時間が経ち、すでに日本は完全な「監視社会」である。へんなと云うが、だから人があやめ、その死体を

クルマでどこかに遺棄しに行こうとすれば、その行動のすべては監視カメラに拾われ、必ずや警察権力の手中に落ちる。コンビニの店先、コインパーキングの入り口、駅、学校、商店街、マンション、民家の軒先。いまや、あらゆるところに監視カメラが置かれ、知らない間にわれわれの行動を見張っている。防犯を優先させた監視社会が



日光二荒山神社に設置された監視カメラ。



日光二荒山神社の監視カメラに写ったライブ風景。

安全の土台となっているのか、それともたがいに監視しあう無数のカメラが人々のプライバシーを脅かし、国家権力からの抑圧の端緒となっているのか。その議論は果てしないし、この稿の役割ではない。いま、国内に無数のカメラが存在しているのは事実だ。そうであるならば、それを逆に楽しんでしまおうと思ったのが事の発端である。

この経緯はこうだ。ある日、取材で新潟から秋田へと続く「羽後浜街道」を走っていた。途中でお腹が空いてきたのだが、どうせならいい店を探したいと思った。だが、クルマを止めてスマホなどでリサーチをする余裕もなかったのだ。ふと遊び心で、東京にいる事務所のスタッフに、いまいる道の沿線の店舗を探しを依頼した。移動しながら、適宜こちらの

場所を東京に報告した。業務の手が止まるので、最初はめんどくさがっていたスタッフだが、そのうちに「自分が旅行しているみたいで面白くなってきた」と言いながら、数km先のマニッシュなラーメン屋や「7号線食堂」というホテル・カリフォルニアみたいな掘って小屋系の定食屋を推してきたりした。そのうちに、この先にある道の駅にライブカメラがあって、いまデスクの上のパソコンでオンラインで見られるから、そこへ写り込んでみると言ってきた。わたしは、即座にそのバカな提案に乗った。

秋田県の象潟(きさかた)海岸。日本海を見渡せる丘の上。芝生の敷き詰められた公園にカメラが向けられている。不特定多数の人間が閲覧可能なこのホームページのライブカメラの解説には、詳細な場所などは記されていない。スタッフが常時映る映像を手がかりにわたしに口頭で場所のヒントを伝え、カメラを探し出しそこに映り込むのである。そして、映り込みが確認されたら、それを画面キャプチャーし、「ほら、こんなマヌケ顔が写りましたよ」とわたしのスマホに証拠写真を送ってくるのである。

中丸謙一郎 (なかまるけんいちろう)

コラムニスト。1963年生。横浜市出身。『POPEYE』『BRUTUS』『SOTOKOTO』誌でエディターを務めた後、独立。フリー編集者として、雑誌の創刊や書籍の編集に関わる。現在は、新聞、雑誌等に、昭和の風俗や日本の観光に関するコラムを寄稿している。主な著書に『ロックンロール・ダイエツ』(中央公論新社、扶桑社文庫)、『車輪の上』(柘出版社)。最近のマイブームは筋トレとサンマー麺。日本民俗学会会員。

これにいうという事実を把握されてしまう。米国・ラスベガスのギャンブル会場などでの撮影や録音を激しく嫌う類の「観光地ライブバシー」の問題である。もはや観光地と監視カメラはセットだと思っていたほうがいい。だが、これが「たのしい観光地」であるための手段ならいいが、旅人を哀れなくさせるだけの意味のない「重し」なのであれば、それはそれで考えものだ。観光地で監視カメラと目を合わせる。ぜひ、みなさんも体験してもらいたい「遊び」である。



旅先なのに東京のパソコン画面に写り込んだマヌケな男。